

## ラオス南部コーヒー栽培地域における農民富裕者の誕生要因

箕 曲 在 弘\*

### The Emergence of Wealthy Farmers in the Coffee-planting Area of Southern Laos

MINOO Arihiro\*

#### Abstract

This paper studies the emergence of wealthy people in the farming area of Lao PDR through an analysis of their livelihood strategies. Barbara Grandin's wealth ranking is used to define the criteria of wealth. After the Lao government adopted a market-oriented economy, a monetary system was extended to the Lao plateau and mountain villages, which used to run on self-sufficient farming. As a result, cash income has become indispensable for everyday consumption.

Previous studies on the introduction of a monetary economy in the mountain areas of Lao PDR have focused on economic inequality. Some studies pointed out the factors that led to the emergence of wealthy people in these areas, such as the brokerage of non-timber products and the introduction of cash crops. Other studies examined the flow of money, which is brought into the villages by people living outside, such as migrant workers and refugees.

This case study of Boloven plateau in southern Lao PDR suggests that these factors are not the primary reasons for the emergence of wealthy people in this area. It can be attributed instead to farmers' experimentation with new varieties of cash crops and organic fertilizers, as well as new forms of trade with foreign importers.

**Keywords:** Lao PDR, cash crop, wealthy people, livelihood strategies

キーワード：ラオス人民民主共和国, 換金作物, 富裕者, 家計戦略

---

\* 東洋大学社会学部社会文化システム学科：Department of Sociocultural Studies, Faculty of Sociology, Toyo University, 5-28-20 Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8606, Japan  
e-mail: minoo@toyo.jp

## I はじめに

本論考は、焼畑耕作から換金作物であるコーヒー栽培に生業の中心を変化させてきたラオス南部ボラベン高原の農村を対象に、ラオス北部の山岳地帯のような「換金作物栽培移行期」ではなく、「換金作物栽培移行後」の村落内で「富裕」だと見なされている者たちの家計戦略に関するライフヒストリーをもとに、富裕者が誕生する要因を考察する。<sup>1)</sup>

具体的には、1986年の市場開放後における現金収入の必要性の増大を背景に、住民がどのような手段で現金を獲得しているかを検討しつつ、後述する相互評価法を使用し、村落内部の者たちが、同じ村落内で「富裕」だと見なしている者を特定し、彼らが考える「富裕さ」の条件について明らかにする。その後、筆者が行った家計調査の結果をもとに、4名の「富裕者」の資産や収入の特徴を描写したうえで、そのうち2名のライフヒストリーをもとに、なぜ彼らが周囲の人々に「富裕者」と認められるようになったのかを考察する。ここから従来の富裕な世帯とは異なり、この2名が、これまでのラオス農村における富裕者の特徴としてあまり言及されてこなかった、実験的な試みの実践や海外の輸入業者との「直接的」な取引を行うことで、世帯の利益を拡大してきたことを示す。

林産物の売却や賃金労働などの農外活動や換金作物の導入によって現金を獲得し、稲作を中心とした生業構造が変化していく過程については、ラオス北部を中心に数多くの研究がなされてきた [横山 2001; 横山・富田 2008; 中辻 2004; 2005; Rigg 2005; 百村 2008; 河野・藤田 2008; Baird and Shoemaker 2008]。例えば、横山は、ウドムサイ県の山村において雑貨店経営や林産物の仲介、タクシーの運転手といった農外活動が導入されていく過程を明らかにしている [横山 2001]。一方、中辻はルアンパバーン県の村において、換金作物としてのハトムギやカジノキの栽培が盛んになっていった過程を描写している [中辻 2004]。これらの研究は、いずれも市場開放以前から続く生業が、市場開放後にいかなる影響を受けてきたのかという問題意識を共有しているが、その一部に、市場開放後の商取引の自由化が引き起こした現金収入の増加による貧富の差に注目している論考がある [中辻 2005; 百村 2008; Rigg 2005]。これらの論考は農村に富裕層が誕生していることを示唆するが、ではいったい農村の富裕層は、いかにして誕生するのだろうか。

これまでも王国時代にはチャオ・ムアンやラームなどに見られるように、広大な農地を保

1) 本稿における「換金作物栽培移行期」とは、農民の主な生業が焼畑陸稲栽培から、換金作物の栽培へと移行する途上にある期間のことを指す。ボラベン高原の場合、1910年代にコーヒーをはじめとする換金作物が導入されているが、本稿では、焼畑陸稲栽培の耕地面積の減少と並行して、コーヒー栽培のための耕地が広まってきた1980年代以降を「移行期」と捉えている。一方、「換金作物栽培移行後」とは、農民の主な生業がほぼ完全に換金作物の栽培に移行し、換金作物を売却し、主食の米を購入するようになった状態を指す。

有し、多くの使用人を使役することで、周囲から富裕者とみなされてきた人びとは存在した。だが、こういった富裕者を規定する要因は、現金の多寡とはほとんど関係がない。だが、換金作物の売買が生業の中心になることによって、富裕者のあり方も変化し、現金収入と直接結びついた形で規定されることになる可能性がある。そこで、このような換金作物栽培下における農民富裕者のあり方に注目するのである。

これまでの研究では、農村の富裕者の誕生要因として、林産物の仲買 [横山 2001]、自給作物の商品化、あるいは換金作物の導入 [横山・富田 2008]、出稼ぎや海外難民からの送金 [横山 2001: 16]、あるいは銀行からの融資 [河野・藤田 2008: 410-411] といった点が指摘されてきた。例えば横山は、農外活動を導入している世帯は、そうでない世帯よりもトラクターなどの高価な農業資本財を所有している割合が高く、農外活動を主業としている世帯のほとんどが林産物の仲介によって資本を蓄積してきたと指摘している [横山 2001: 13-15]。また、富田は中国国境地域の村において、在来品種の米が商品化され、続いてシャロット、ニンニク、サトウキビ、飼料用トウモロコシなどが商品作物として中国に輸出され、それによって得た現金で村人は、中国製の耕耘機を購入するようになったと述べている [横山・富田 2008: 115]。

だが、本稿で対象とするボラベン高原の村落においては、少し状況が異なる。コーヒーを栽培し、その売却益によって主食である米を購入して生活しているボラベン高原の農民の場合、銀行のある街に近い村落は別として、僻地の村落では銀行からの融資を受けている者は稀であり、他方、出稼ぎや難民からの送金を受けている者も見いだせない。<sup>2)</sup> また、住民の一部はコーヒーやキャベツの仲買を行っているものの、家計収入全体のなかでそこからの収入が占める割合はそれほど多くない。そこで本稿では、自給作物の栽培から換金作物に転換しつつある「換金作物移行期」の農村とは異なり、おもな生業を換金作物の栽培としている「換金作物移行後」の農村を対象として、富裕者とされる者たちのライフヒストリーを辿ることで、彼らが資本を蓄積してきた過程を明らかにし、そこから農民富裕者がいかにして生まれてきたのかを検討していく。

そのためにまず注意しておくべきは、「富裕者」とは誰かという点である。一般に富裕者を特定する際、所得という数値に還元可能な指標をもちいることが多い。たとえば中辻は、焼畑から換金作物が導入されている過程にある北部村落において、現金収入額の世帯差に注目することで村落内の貧富の差のあり様について考察している [中辻 2005]。だが、短期調査で得ら

2) もっとも銀行融資へのアクセスの弱さは、ラオスでは一般的なことであり、決してボラベン高原の僻地の農村に限ったことではない。むしろ、南部のチャンバサック県の低地部は、革命時に欧米諸国へ亡命した人びとからの送金を比較的受けやすい地域ではある。だが、ここで強調したいのは、銀行融資や海外からの送金以外の要因によって富裕者が誕生するケースがあるということであり、当該地域の特異性を記述することではない。

れる農民の所得に関する情報は、それが一時的な「はずれ値」であるか、およそ平年並みの常態を反映するものであるかの区別がつきにくい〔佐藤 2002: 109〕。後に本論考の事例でも確認するように換金作物であるキャベツは、時期ごとの買取価格の変動が激しく、儲かるか儲からないかは、農民に言わせれば「宝くじ (*lin huwai*)」のようなものと認識されている。一方、近年、比較的買取価格が安定しているコーヒーでさえ、毎年の収穫量の差が大きくなり、その結果、年ごとに収入の差も大きくなる。このように、ある年の農民の所得は、その年の天候や市場価格の変化の影響を受けやすく、あくまで断片的な指標としてしか機能しない可能性がある。

この問題を避けるために、人類学では当該地域に長く住む村人たち自らの相互評価を聞きとることで内在的にその社会の階層差を明らかにする「相互評価法」をもちいた研究がおこなわれてきた〔Silverman 1966; Castro *et al.* 1988; Grandin 1988〕。この相互評価法は、勤勉性や借金の有無など外部の調査者には見えにくい要素を含めて、一次的な所得の変動に左右されずに世帯の実情を反映させることができる〔佐藤 2002: 109〕。本稿では、グラディンが発案したカード式評価法を用い、対象村落固有の豊かさの基準に照らし合わせて階層を分類し、村人にとっての富裕な者が誰なのかを明らかにしたうえで、それと家計調査から得られたデータを相互に用いて、村落内の「富裕者」を特定していく。

調査は2007年4月から2008年3月までの1年間に得た収入の内訳と金額、そして主な支出とその金額について、2008年9月に質問紙に基づいた筆者と調査助手による農民への聞き取りによって行われた。<sup>3)</sup> 起点を4月としたのは、コーヒーを売って得られる収入が4月に受け取れるためである。このコーヒーからの収入を受け取った時点を経始点として、次の年のコーヒーからの報酬を受け取る前までの1年間に調査の対象とした。

調査対象は50世帯であり、各世帯の長が回答した。その内、データに不備があり2世帯分は除外した。調査には筆者のほか、ラオス人の調査助手と副村長が同行し、K村の家屋を借りて行われた。調査対象世帯は、副村長が任意で選び、毎日3～4世帯を訪れた。

## II 対象地域の概要

### II-1 ボラベン高原の地理的概要とエスニック集団

ボラベン高原は、チャンパサック、セコン、サラワン、アタプーの4県にまたがる、600km<sup>2</sup>の地域である。ボラベン高原の東側は、ベトナムとの国境となっているルアン山脈（安南山脈）

3) 筆者は2008年3～12月、2009年9月～2010年3月までの15カ月間を調査地で過ごしていたが、本稿で使用した量的なデータは、2008年9月に取得した。質的な部分については、この期間以外に取得したデータも含まれている。

が走っており、現在、南側はセーピアン国定保護区となっている。標高1,426mのテバター山のふもと、海拔1,200mの地点には、ボラベン高原の中心、チャンパサック県パクソン郡庁舎がある。パクソン郡は、年間の平均降雨量が2,624.9mm、年間平均気温が19.6度とされるとおり、<sup>4)</sup> 比較的冷涼多雨な地域だといえる。

ボラベン高原には、フランス植民地期以前から、ラオス政府のかつての分類では中高地ラオ（ラオ・トゥン）と分類され、言語学上の分類によればオーストロ・アジア語族（モン・クメール語系）に分類されるエスニック集団が住んでいる [Chazee 1999]。なかでもパクソン郡にはラベン (*Laven*) と呼ばれる集団が多く住んでおり、彼らはこの地域において、これまで精霊を信仰し、森を切り開きながら焼畑陸稲栽培を行い、森の野生動物を狩猟し、林産物を採集しつつ、家族ごとに移動しながら生計を立ててきた。<sup>5)</sup>

このボラベン高原では、海拔600m以上の地域でロブスタ種 (*C. canephora* var. *robusta*) のコーヒーが栽培され、海拔800m以上でアラビカ種のコーヒー、なかでもティピカ (*C. arabica* ‘Typica’) と交配種であるカティモール (*C. arabica* × *canephora* ‘Catimor’)<sup>6)</sup> が栽培されている。いずれの地域でも調査時点では、米を栽培しておらず、住民はコーヒーを売却した収入で米を購入しているのが特徴である。また、一般的にロブスタ種は海拔1,000m付近では栽培されることがあまりないが、ボラベン高原の場合、海拔1,200mの地点でもロブスタ種が植えられている点も特徴的だといえる。したがって、ボラベン高原では、常畑でのコーヒー栽培が主とな

4) 平均気温と降雨量の数値は、1995年に行われた国際協力事業団による農業・農村総合開発計画のための調査結果から引用している [国際協力事業団 1996: 9]。パクソンに最も近い低地の都市、パークセーの年間平均降雨量が1,920mmであることから、パクソンの雨量がいかに多いかがわかる。この地域がコーヒー栽培のメッカとなったのは、この気象条件がコーヒー栽培に適しているからという理由によるところが大きい。

5) この民族集団の表記のされ方はさまざまである。これまで *Loven*, *Lawen*, *Laven*, *Boloven*, *Laweenjru*, *Jaru*, *Jru* などと記されてきた [Chazee 1999]。2006年発行の人口世帯調査におけるエスニック・グループごとの人口統計調査によれば、*Laven* という表記は用いられず *Yrou* と記されている。この調査報告書によれば、*Yrou* は全49民族のなかで21番目に多く、人口47,175人、全人口の0.8%を占める [Lao PDR, SCCPH 2006]。筆者の調査によれば、自称はジュル、ラオが付けた他称がラベンのものであるが、本論考では一般に流布した名称であるラベン (*Laven*) と表記する。

6) カティモールは、アラビカ種のカトゥーラ (*C. arabica* ‘Caturra’) とロブスタ種とアラビカ種の交配種であるハイブリッド・デ・ティモール (*C. arabica* × *canephora* ‘Hibrido de Timor’) を交配させてできた品種である。一般に病虫害への抵抗性が強いロブスタ種の特徴を含みつつも、他のアラビカ種と同様に3年で実がつくという特徴がある。樹木の高さや葉の形はカトゥーラに非常によく似ており、ラオスではアラビカ種が収穫できる10月から11月頃に収穫できることから、ラオスでは「アラビカ種」として認識されている。また、流通段階では、アラビカ種として取引されている。ラオスにおいてカティモールは、1990年に南部の都市パークセーから35kmの地点に設立されたコーヒー調査実験センター (Coffee Research and Experimentation Center: CREC) が、世界銀行やフランス開発庁の資金を得た結果導入された。1994年にフランス人専門家によって栽培実験が行われ、1990年代後半から徐々に農村に普及しだした。また、基本的に、肥料を播かなければ高い収量を維持できないと言われるが、調査当時、肥料を播くという習慣はほとんどなく、一部の農民だけが牛糞やコーヒーの実の滓から堆肥を作り播いていた。それにもかかわらず、在来のティピカの倍程度の収量が得られた。

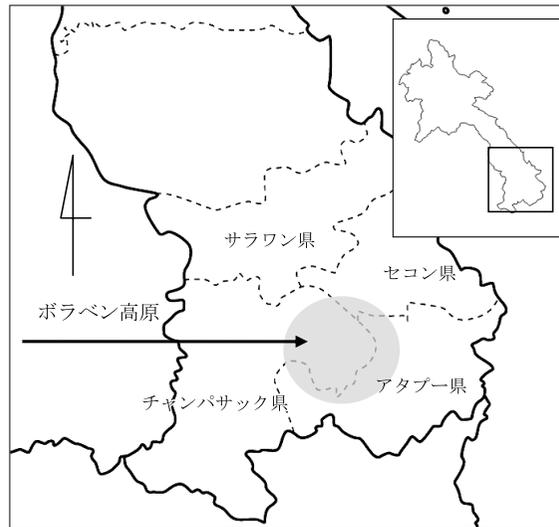


図1 ラオス南部の地図

出所：白地図より筆者作成。

るが、海拔600mから800m付近の地域ではロブスタ種、海拔800m以上の地域ではロブスタ種とアラビカ種の栽培が行われている。このコーヒー栽培に加えて、キャベツやカルダモンなどの換金作物を栽培したり、牛、豚といった家畜や家禽類を飼育したりする世帯もある。また、どの世帯においても、自給のための畑作を行っている。自給用の作物としては、隼人瓜、トウガラシ、トウモロコシ、サトウキビ、生姜、バナナなどが一般的に見られる。住民は多く収穫できた場合は、地元の仲買人を通して一部を売却している。

## II-2 K村の概要

ボラベン高原の中心、パクソン郡中心地から国道23号線に沿って12kmほど北上した地点に位置するのが、人口675人112世帯で構成されているラベン中心のK村である。<sup>7)</sup> 1959年、1つの村が3つに分離し、その1つとしてK村が誕生した。内戦期に、住民は森のなかに逃げ込んでいたが、1974年、後述するソンの家族とその親類の合計4家族が、その翌々年には、現在、第二長老を務めるKという人物の家族とその親類の合計4家族がK村に戻ってきた。その後、K村は現在の人口を擁するほどにまで拡大した。

海拔1,250mに位置するこのK村でコーヒー栽培に従事するのは112世帯すべてであり、ア

7) 人口と世帯数は、調査した2008年3月時点のものである。

表1 調査対象世帯の属性

世帯数・人口		
合計	50 世帯	
1 世帯当たりの構成員数 (平均)	7.04	
家長の年齢 (平均)	47	
農民の数* (平均)	3.94	
学生の数 (平均)	2.27	
性別 (人)		
男性	170	
女性	178	
年齢 (歳)		
平均年齢	男性	女性
	24.1	22.0
出生地 (人)		
	男性	女性
K 村	38	37
K 村以外	12	13

出所：調査データから筆者作成。

注：性別と年齢は、調査対象世帯のすべての構成員が対象となっている。だが、出生地は調査対象世帯の夫婦だけが対象となっている。

\* ここでいう「農民」とは、調査対象者自身が使うカテゴリーをそのまま載せているが、農業に従事する住民を指す。確かに彼らが農外活動にも従事しているが、それらはいくまで補助的な現金獲得手段であるという認識で、おもな生業を農業としているため、彼らは自身を農民 (*sao suwan*) と規定する。

ラビカ種<sup>8)</sup>とロブスタ種の両方を栽培しているのは104世帯、アラビカ種のみが6世帯、ロブスタ種のみが2世帯となっている。一方、米を自給している世帯は1つもない。また、キャベツや白菜などコーヒー以外の換金作物を栽培していたり、牛あるいは豚を飼っていたりする世帯がある。以上から、このK村はボラベン高原のなかで典型的な生業を営んでいる村の1つであり、「換金作物栽培移行後」の農村だといえよう。

K村ではもともとティピカばかりが栽培されていたが、病虫害の被害にあい、80年代にロブスタ種へ栽培品種を転換していった。調査時にはアラビカ種ティピカ、ロブスタ種ともに収量が落ち込み、世帯によっては最盛期の10分の1程度となった。そこで、3年で実が付き、高収量であるカティモールの栽培に徐々に置き換わっている。<sup>9)</sup>

8) ここでは注6)よりカティモールもアラビカ種と見なして集計している。

9) まとまった実が付くまでにティピカは4年、ロブスタ種は5年かかるため、カティモールは植樹後、比較的早くから収穫可能だといえる。また、ティピカは成木で5kg程度のチェリー（コーヒーの実を指す）しか収穫できないが、カティモールの場合、2倍の10kg程度は収穫可能である。庭先でのコーヒーの買取価格は、年々上昇しており、2007年には、アラビカ種のチェリーが11月中旬に、3,000 kips/kg（年間の最高値）となった（2007年当時、100 kipsは約1.3円）。仲買人はティピカとカティモールを同じく「アラビカ」として同じ値段で買い取るため、農民は高い収量のカティモールを選択するようになる。一方、ロブスタ種は、一般に、生豆で売却されるが、2007/08年では、15,000 kips/kg前後であった。ロブスタ種もアラビカ種と同様に、当時、買取価格は年々上昇傾向にあった。

表2 世帯構成別のコーヒー栽培に利用している耕地面積

面積 (ha)	ラベン (男)+ ラオ (女)	ラオ (男)+ ラベン (女)	ラベン (男)+ ラベン (女)	ラオ (男)+ ラオ (女)	合計
1～2	6 (54.5%)	3 (42.9%)	8 (32.0%)	6 (85.7%)	23
3～4	4 (36.4%)	3 (42.9%)	13 (52.0%)	0	20
5～6	1 (9.1%)	1 (14.3%)	0	1 (14.3%)	3
7以上	0	0	4 (16.0%)	0	4
合計	11	7	25	7	50

出所：調査データから筆者作成。

以下では、K村の概要を把握するために、まずは表1から調査対象世帯の属性を確認したい。1世帯あたりの構成員は平均7.04人、家長の年齢は平均47歳である。各世帯の農民の数は平均3.94人で、学校に通っている子どもの数は平均2.27人である。<sup>10)</sup> 性別をみると、男性は170人、女性は178人となり、平均年齢は男性24.1歳、女性22.0歳である。また、1975年頃、K村には出自がラオの者は1人もいなかったが、その後、ラオの女性と結婚する者が少しずつ現れ、調査対象世帯中で夫婦どちらかがラオなのは18世帯、夫婦ともにラオなのは7世帯となっており、そのすべてが低地の村出身である。

表2は、コーヒー栽培に利用している耕地面積を世帯構成別に表したものである。調査当時、対象となった50世帯中、コーヒー栽培に利用している農地が1～2haなのは23世帯、3～4haなのは20世帯、5～6haなのは3世帯となっている。ここから1～4haの間に多くの世帯が集中していることが分かる。

世帯構成別にみると、ラオ同士の世帯は7世帯中6世帯が1～2haのみであり、比較的所有<sup>11)</sup>している土地が狭いことが分かる。一方、ラベン同士の世帯は25世帯中4世帯が7ha以上、半数以上は3～4haであり、比較的所有している土地が広い。その中間が、夫婦どちらか一方がラオの世帯となり、半数程度が1～2haの土地を所有している。K村はもともとラベンばかりで構成されていた村落であったため、ラオは後からやってきた「新参者」となり、開拓できる土地がほとんど残っていなかった。そのため、ラオ同士の世帯は、比較的狭い土地しか所有していないといえる。K村住民によれば、調査当時には、農地として適している場所はすべて開拓しつくされてしまい、もう耕作可能な土地は余っていないという。

10) K村住民によれば、学校に通っていない子どもは、たとえ学齢期であっても農民として、他方、高齢者は、たとえほとんど農作業ができなくなっても死ぬまで農民としてみなされている。したがって、本調査では「学校に通っている子ども」を被扶養者としてみなし、その他にあたる「農民」を「労働者」として区分している。

11) ラオスの場合、法制度上、土地は政府のものであり、人民は使用权のみ認められているが、人々は慣習的に、「土地を持っている」と表現する。したがって、本論考では、この農民の表現に合わせて、土地について「持っている」あるいは「所有」という表記を使用している。

以上、K村の成立史をたどりながら、調査時点での村落構成世帯と出身、コーヒー耕地面積の関係を見てきた。ここから、ラベン出自の世帯がこの地に最初にやってきて農地を拡大し、その後、婚姻関係を結ぶなどして、ラオ出自の者が村に住むようになり、次第に人口が増加し、開拓できる土地がなくなっていった様子がうかがえる。広大な農地を獲得することで、作物の収穫量を上げることができる一方、上記のように農地の拡大が望めなくなった今、各世帯はどのように収入の増加を試みるのだろうか。以下では、現金の必要性が増大した背景を確認し、それに関連して、K村住民がいかなる手段で現金収入を得ているのかを明らかにしていく。

### III 現金の必要性の増加と現金収入の獲得手段

#### III-1 現金の必要性の増加

ラオスが市場開放する以前、K村の住民は、おもに焼畑陸稲栽培と狩猟採集によって生計を立てていた。もっとも村落の東側に位置するディンデー山でアラビカ種ティピカがよく採れるとされ、内戦期からコーヒーを栽培し、仲買人に売却するなどして現金収入を得ることはあった。<sup>12)</sup>とはいえ、その規模は比較的小さく、あくまで自給作物の栽培が生業の中心であった。<sup>13)</sup>

だが、市場開放後、以下に挙げるいくつかの要因により、家計を維持するために現金の必要性が増加していった。ここでは、食費、税金、電気代、教育費、医療費、耐久消費財の購入費や生産関連費、労賃、家屋の建築費といった項目別に、現金の必要性の増加について素描していく。

市場開放以降、政府は焼畑を抑止する政策を打ち出し、焼畑耕作に従事していた山地や高原の民に対して常畑への移行を促した。この流れの中で、K村住民も徐々に焼畑を止めていき、1990年頃には多くの世帯で焼畑を完全に止め、生業の中心をコーヒー栽培に移行した。この移行の結果、住民は一家で消費される米を購入する現金を手に入れることが、何においても最重要な課題となったのである。

一方、野生動物保護の観点から、政府の指導により住民は森林において野生動物をむやみに狩猟することができなくなった。政府は、その代わりに、鶏やアヒルといった家禽類の飼育や

12) そもそもコーヒーの木がラオスに持ち込まれたのは、フランス植民地期であるが、その時期については諸説ある。岩田 [1960] によれば1905年、Matsushima and Vilaylack [2005] によれば1910年代、Ducourtieux [1994]、Lao PDR, CPC [1995] によれば1920～30年代と記されている。筆者の聞き取り調査によれば、1918年と答えた村が最も古かった。

13) 岩田が1950年代に行ったパクソン地域の村での調査によれば、「村人の生業はいうまでもなく農業であり、陸稲栽培によって米を自給し、コーヒー栽培によって現金収入をはかるのが一般的である」と記している [岩田 1960: 59]。岩田が調査した村は、パクソンから北へ17kmと記しており、筆者の調査地にかなり近く、1950年代におけるK村周辺でも同様の生業形態であった可能性は高い。

魚の養殖を推奨するようになったが、住民は、肉類を市場で、あるいは行商人から購入するようになった。牛や豚は以前から家畜であったが、日常的に食する対象にはなっておらず、あくまで緊急時の売却用か、冠婚葬祭や儀礼の際に食するものとされている。他方、野菜類、根菜類、米以外の穀類は、調査時点においても、市場で購入する者は稀であり、住民は家屋の隣にある家庭菜園か、コーヒー農園で植えられているものを、適時、収穫して食べている。

政府は住民から税金を徴収しているが、あまり厳格な徴収をしておらず、住民も正確にいくら払っているか覚えていない。少なくとも、K村住民は、毎年、20,000 kipsほどの土地税を払っているが、<sup>14)</sup> それ以外に何らかの税金を支払っているという話は聞かない。一方、2000年に電気が通ってから、各家庭に電気が引かれ、使用量に応じて、毎月だいたい15,000 kips前後を支払っている。なお、水は井戸からポンプでくみ上げているため、水道代が徴収されることはないものの、ポンプを使えば、その分電気代が徴収されることになる。

以上の費目は、近年になり、住民が生活する上で必ず支払わなくてはならないものばかりだが、それ以外も、教育や医療といった領域において、現金の必要性は高まっている。例えば、K村では、調査当時、小学校 (*horn hyan pathom suksaa*) への進学率が徐々に上昇していた。小学校の学費に相当する登録料は、K村の場合、年間20,000 kipsであるが、さらに制服や文房具など、教育に関連する支出が追加される。日本の中等・高等学校に相当するマツタニヨム (*horn hyan matthanyom*) に進学した場合、登録料や関連する出費も増加する。学校の所在地も村から10 km 離れているため、なかにはバイクで通う者もあり、毎日のガソリン代がかさむ。

医療費については、近代医療に頼る傾向が日に日に増している。パクソン郡の中心地には公営の病院があり、無料で診療が受けられるが、薬は薬局で購入しなくてはならない。重い病気になると、パクソンの公営病院では対応できず、村から60 km 離れた都市であるパークセーの公営病院に行かねばならない。だが、パークセーの公営病院すら対応できない場合、民間のクリニックで診療を受けねばならず、この場合、公営とは異なり、診療費がかかる。通院や入院をした場合、年間で数百万 kips も支払うこともある。病気や怪我は、突発的に生じるので、治療費を賄えない家庭は、親類から金をかき集めることもある。

以上のように、90年代に入り、K村住民にとって現金の必要性は高まったといえるが、このような食費、税金、電気代、教育費、医療費以外に、耐久消費財の普及や生産関連設備の導入においても現金の必要性が増していった。2000年に入り、村に電気が通るようになると、テレビやステレオ一式が、村中に普及した。また、同時期には、中国製の安価なバイクが登場し、それを購入する村人も出てきた。農作業においては、トクトクという耕耘機に荷台を取り付け

14) この土地税は、農地に対して課されるのではなく、居住地に対して課されている。つまり、家屋を含んだ敷地1カ所あたりの税であり、土地の面積やグレードによって徴収される金額が変わるわけではない。

たものが普及し、収穫した実を農園から家屋まで運ぶ役目を担った。その後、コーヒーの水洗式加工法が導入されると、一部の農民は果肉除去機や、脱穀機を購入するようになった。このようなさまざまな機材は、それを購入できる現金が用意できた者から購入され、調査時点では、村内の多くの世帯に導入されている。

一方、コーヒー栽培に伴う労賃も発生している。コーヒー栽培の規模が小さい場合には、草刈りや収穫など集約的に労働力が必要な時においても、家庭内の労働力で賄うことができた。しかし、耕地面積の拡大に伴い、必要な労働力が不足し、村落外部から臨時の労働力を招きいれなくてはならなくなった。その際、労賃は現金によって支払われる。

また、家屋の建築においても、現金の必要性が増している。高床式の家屋において、トタンの屋根を購入して取り付けるのは、村の中ではすでに一般的になっているが、さらに、一部では、レンガ造りの家屋に変わりつつある。K村の住民によれば、2003年まではレンガ作りの家屋は、一軒もなかったが、調査時点では、6軒がすでに完成しており、7軒が建築中であった。このようなレンガ造りの家は、鉄骨、砂、小石、レンガといった資材を購入しなくてはならない。村人が生活に必要なだと考える食費や生産関連費などを除いて、余った現金があればこれらの資材を少しずつ購入し、数年かけて建てていく。

このように、現金への依存度は、自給自足の生活から換金作物中心の生活になって20年ほど経ち、次第に増していったことが分かる。住民は現金がなければ米が購入できないというだけでなく、近代的な教育や医療が受けられない。さらに、コーヒー生産を促進する政府の働きかけに応じ、コーヒー栽培や加工精製、あるいはキャベツ栽培を行うにも現金が必要となってきたのである。では、これらのニーズを満たすために、K村の住民はどのような手段を用いて現金を獲得しているのだろうか。

### III-2 現金収入の獲得手段

K村における現金獲得手段は、おもに5つに分類できる。それらは、すなわち、コーヒーの売却、キャベツなどコーヒー以外の農林産物の売却、家畜の売却、賃労働、商店経営や仲買などの商売である。以下では、住民が、一般的に、これら5つの手段をどのように駆使して現金を獲得しているのかを順に明らかにしていく。

K村の住民が栽培する2種類のコーヒーのうち、アラビカ種は11月頃、ロブスタ種は1月頃と、それぞれ収穫時期が異なる。したがって、住民にとって、大きく分けて2回、まとまった現金を得る機会があることになる。一方、住民は、それぞれの品種において、獲れたチェリー（コーヒーの実を指す）をそのまま売却するか、精製加工してから売却するかを選んでいる。チェリーのまま売却する場合、収穫したその日に現金が手に入る一方、日によって変動する買取価格に従って売却するので、高く売れるか、安くなるかは状況次第となる。一方、水洗式の

加工をしてパーチメント豆という果肉を除去した状態で売却する場合、加工にある程度日数がかかり、収入を得るまでに時間を要するが、保管が可能なので、高く売れる時に、一気に売却することができる。どちらの場合にせよ、K村では、日によって異なる買取価格を提示する仲買人に売却される。なお、アラビカ種のなかでも古くから残っているティピカの場合、生産組合の買取対象となり、これは組合が所有する脱穀機で脱穀を済ませた後、事前に交渉によって決めた価格で日本の買取業者に売却される。

チェリー、パーチメント豆、生豆で、それぞれ売値は異なるが、パーチメント豆や生豆は、チェリーに比べ、加工の手間がかかるため、チェリーよりも高い報酬が期待できるものの、手間を省きたい農民は、チェリーで売却する傾向がある。とはいえ、チェリー、パーチメント豆、生豆のどの状態でも、近年の国際市場価格の上昇に伴い、買取価格は年々上昇している。だが、このK村で特に顕著なのは、近年の価格上昇と反比例するかのように、この10年でティピカとロブスタには、徐々に実がつかなくなっているという点である。K村を含めてこの地域のコーヒー農家は、化学肥料を含めて、一切の肥料を撒く習慣がなく、木が古くなったことが原因で実がつかなくなったと思われる。この結果、住民は、実がつかなくなった木を切り、高収量が期待できるカティモールに植え替えている。

K村の調査対象世帯では、コーヒー栽培以外にキャベツ栽培に取り組む世帯が41世帯ある。キャベツ栽培は、90年代末からタイのウボンラチャタニ県とラオスのチャンパサック県との協定によりはじめられ、農民はタイ側が指定した種、化学肥料、農薬を使用し、農民は規格に合った製品を生産し、タイとラオスの国境であるチョンメックの買取場で売却している。キャベツは年2回から4回の収穫が可能だが、買取価格は調査当時、1kgあたり最低の時期で200kipsに落ち込み、最高の時期で2,300kipsにまで達するほど大きく変動していた。はじめに述べたように、住民によれば、売る時期によっては赤字になり、運が良ければ大きく儲けられることから、キャベツの売却は「宝くじ (*lin huwai*)」であると表現している。

以上のコーヒーとキャベツの売却が、K村の住民の主要な収入源になっているが、それら以外にもジャガイモ、生姜などの農産物やカルダモン、シナモンといった林産物を仲買人に売る世帯もある。とはいえ、これらの売却は散発的であり、なおかつ定期的にこれらの産品からまとまった収入を得ているわけでないようである。

調査対象世帯のなかで牛や豚を飼っているのは33世帯あり、これらはまとまった現金が必要になった際に売却される。豚は牛より飼育が簡単であるが、売却時の金額は低い。ただし、頭数を増やすことによるリスクもあり、住民は自分たちの管理できる範囲で家畜の飼育を行っている。たとえば、頭数を増やすと、行方不明や盗難のリスク、あるいは疫病のリスクが増える。疫病については予防注射をすることで、リスクを軽減できるが、そこまでしている住民はほとんどおらず、病気で家畜がすべて死んでしまったという話を時々耳にする。

K村住民は農産物の売却によって得られる収入が少なく、家計の維持ができなくなった場合にのみ、農園の草刈やコーヒーの収穫、近隣住民の家屋の建築などの賃金労働によって現金収入を得る。これらの労働は学齢期の者たちの小遣い稼ぎの意味合いもあるが、賃金労働は、一般的にコーヒーやキャベツの売却に対して補助的な位置づけとなっている。<sup>15)</sup> 低地部の住民の場合、タイへの出稼ぎは、最も主要な現金獲得の方策になっているが、少なくとも筆者の調査したなかでは、タイに出稼ぎに出ている者はおらず、パークセーや首都のヴィエンチャンに数カ月間出稼ぎに出ている者がいるのは、1世帯あるのみであった。

賃金労働とは別に、ある程度、まとまった資本のある者は、町の市場で生活用品をまとめ買いし、自宅の軒先で小規模な商店を営むことで、現金収入を得る。K村には2軒の商店があり、どちらもK村住民が、日常的に利用している。キャベツの仲買をする世帯が、この村には2つあり、彼らは韓国製のピックアップトラックを所有し、それにキャベツを積み込み、国境の買取所と村を往復している。同様に、コーヒーの仲買を始める者も出てきており、これまでには2名のみが仲買をしていたが、2007年頃から、さらに3名の者が仲買をするようになった。これらの3名は、パクソンの町で仲買を営む者に売却しており、いわば「子仲買人」として位置付けられる。仲買の規模は、キャベツ、コーヒーともに、世帯によってかなり異なっている。

食糧など生活に必要な財が購入できなくなった場合、賃金労働に出て日銭を稼ぐことになる。だが、それすらできない場合、親類から金を借りたり、おもに親世帯から小遣いとして現金を譲り受けたりすることがある。パクソン市街に近い村では、銀行から融資を受けることもあるようだが、K村の場合、そのような世帯はなく、あくまで近隣の親類から借金をしている場合が多い。<sup>16)</sup>

以上、コーヒーの売却、キャベツなどコーヒー以外の農林産物の売却、家畜の売却、賃金労働、商店経営、コーヒーやキャベツの仲買といった方法を組み合わせることで、K村住民は必要な現金を獲得し、家計を成り立たせていることがわかった。これらの組み合わせは、世帯によって異なり、人より多く働いて、少しでも現金を多く稼ごうとする世帯がある一方で、それほど働かず、楽に稼げる分だけ稼ごうとする世帯もある。当然だが、これらの世帯がとる家計戦略は、世帯内の労働者や扶養者の数によっても異なる。したがって、K村住民全体の家計戦略の特徴を描きだすのは難しいが、本稿では以下で、このような生業変化のなかで生まれてきた「富裕者」に注目し、その家計戦略の特徴について考察していく。

15) 調査対象48世帯中、約半数の25世帯が賃金労働をしており、内20世帯は草刈か収穫作業に従事していた。その他、家屋建設が4世帯、その他、パークセーのホテルや商店で働いている者もいた。

16) 調査対象48世帯中31世帯が何らかの形で借金をしていたが、内17世帯が村落金融から、12世帯が親や息子、その他の親類から現金を借りていた。他にも友人、あるいはベトナム人という回答もあった。親やきょうだいから、いわゆる小遣いをもらっていた世帯は、48世帯中、15世帯あり、最高額が5,000,000 kips、最低額が250,000 kipsであった。

## IV 農民富裕者の特徴

### IV-1 村民における富裕者の認識

村落内で「富裕 (*han mii*)」とされる者は、どのような人たちなのだろうか。まずは本稿冒頭で言及した相互評価法の手順について説明する。<sup>17)</sup>

1. 最初にK村の住民台帳をもとに、村のすべての家長の名前をカードに記入した。
2. 次に、村の事情をよく知る者を選び（今回は副村長2名）、<sup>18)</sup> カードを広げて「家計のレベル (*ladap khong seetakit khopkhua*)」に応じて3段階に分類してもらうように依頼した。さらに、それぞれのグループを3段階に分類し、計9つのグループを作った。
3. さらに、最も貧しい部類にランクされた人から1名を選び、その人にも同様の評価を依頼。合計3名に相互評価をしてもらった。その際、分類基準を聞きだし、K村の住民が経済面で重視している財や能力がどのようなものであるかを明らかにした。
4. 最後に、3名の評価結果を点数化し、平均値を出して、それに基づいてK村全世帯を彼らの考える経済的なレベルに応じて9段階に分類した。<sup>19)</sup>

以上の手順を経て、K村112世帯の社会階層を9段階に分けた場合、表3のようになった。Aが「最も富裕」、Iが「最も貧しい」という9段階に分け、Bに4世帯が分類された。ソン、ブンラップ、ブワチャン、ソンプーンという、これら4世帯の家計データは次節において扱うが、ここでは3名の評価者がどのような基準で世帯を分類したのかを明らかにしたい。

3名の評価者にはそれぞれ3～4つの分類基準を挙げてもらったが、評価者の一人である副村長のK氏は、①牛の所有、②肥沃な土地の所有、③世帯内の労働力の多さの3点を挙げている。またもう一人の副村長であるS氏は、①世帯内の労働力、<sup>20)</sup> ②知識・能力、<sup>21)</sup> ③儉約の3点、

17) 相互評価法の手順については、佐藤〔2002: 109-111〕を踏襲している。

18) 村の事情をよく知る者は、一般に、村長や長老と呼ばれる人たちであるが、なかでも長老は村のしきたりや来歴などについての知識を有するものであるのに対し、村長はすべての村人から要望を聞き入れたり、税金を徴収したりするなど、村人の生活全般についての知識を有する。そのため、本調査の目的からすると村長にお願いするのが妥当だと判断した。村には村長が1名、副村長が2名いるが、調査した日に村長は村にいなかったため、村長と同等の知識を有する2名の副村長に相互評価を依頼した。

19) 最も富裕なグループから最も貧しいグループまで、1点から9点の範囲で点数化し、平均値を出してから、さらに各世帯を「1点」「1点より多く、2点以内」「2点より多く、3点以内」……「8点より多く、9点以内」という9段階に再分類した。この際、評価者全員が1点に分類していれば、最も高い「1点」のグループに割り振られるが、そのような世帯はなかったため、実質的に最も富裕な世帯は「1点より多く、2点以内」となり、結果的に各世帯は8段階に分類されることになった。

20) K氏は「子どもがたくさんいることで、子どもをたちが労働の担い手となり、生産量をあげられる。またそれに加えて世帯の構成員全体が、健康であることも条件である」という。

21) ここで言われている知識・能力とは、単に農園を正しく維持管理する知識や能力があるというだけでなく、先見の明があり、自分で判断して物事を決められることも含まれている。

表3 K村の社会階層

	A	B	C	D	E	F	G	H	I
世帯数	0	4	7	14	25	25	21	12	4
割合 (%)	0	3.6	6.3	12.5	22.3	22.3	18.8	10.7	3.6

出所：調査データから筆者作成。

注：AからIはK村の社会階層を表し、Aが最も富裕な世帯、Iが最も貧しい世帯を意味する。

最後の評価者であるカンパーストは、①自動車などの運搬機材の所有、②完成された家屋があること、③土地の所有、④商売をしていることの4点を挙げている。3名中2名に共通するのは、世帯内労働力と土地の所有の2つだけであり、あとはそれぞれ異なった基準を挙げていることが分かる。

なかでもK氏は、富裕な者として挙げている上記の4名について、次のような説明をした。<sup>22)</sup>

ソンプーンは、父母からたくさんの牛を授かった。それを活かして金持ちになった。だが、子どもはほとんど学校に行っているため、世帯内の労働者が少ない。プワチャン、ブンラップ、ソンは、節約を心がけ、自分で牛を購入し、頭数を増やしてきた。一方彼らは、世帯内の労働者が多い。プワチャンの家の女性は、ほとんど学校に行っていない。ソンの家では、誰も一切教育を受けていない。こうした子どもたちはすべて、労働力となる。

このK氏の説明は、土地はもちろんのこと、家畜や労働力という従来からの農村富裕者もつ典型的な要素を挙げ、これらの多さが富裕になるための条件であると理解しているようである。だが、家計データとその後のライフヒストリーから見えてくるのは、この説明とは別の要因である。

#### IV-2 4名の富裕者の概要

表4は、この4つの富裕者世帯における世帯内構成<sup>23)</sup>と家畜、土地、収入の内訳、主な支出、資産保有状況などの基本的な情報を表したものである。<sup>24)</sup>世帯の構成人数が平均よりはるかに多いのは、ソン、ソンプーン、プワチャンの世帯である。3世帯とも10人を超えている。だが、ブンラップの世帯だけは、平均よりやや多い8人である。家長の年齢もブンラップを除いた3

22) K氏以外の2名については、K氏ほど詳しくどのような人が富裕者なのかを説明してくれなかったため、K氏の説明のみを記載している。

23) 本稿では、ラオ語の *huang* の訳語として「世帯」という表現を使っている。*huang* は、単に「家」とも訳されるが、生産と消費の単位でもあることから、世帯と表記する。

24) この表に示されたデータは、すべて聞き取り調査によって得ているが、聞き取った内容の妥当性を確認するために、聞き取りの後に実際に各世帯の農地に赴き耕地面積と収穫量を確認している。

表4 K村の富裕な世帯の構成員と家畜、土地、収入

世帯番号 仮名	3 ソン	36 ソンブーン	26 ブンラップ	48 ブワチャン	調査対象48 世帯の平均
世帯構成員数	10	11	8	11	7.04
家長の年齢	70	56	48	60	47
農民の数	8	2	4	8	3.9
学生の数	2	5	3	2	2.3
家畜の数					
牛	17	20	17	35	7.4
豚	0	1	0	1	0.14
耕地面積 (ha)					
カティモール	6	5.5	0.25	1.5	0.6
ティピカ	0	1.5	0.5	2	0.4
ロブスタ	4	0.5	3	1	0.9
キャベツ・白菜	0	0.5	1	0.35	0.04
合計	10	8	4.75	4.85	1.94
空き地 (ha)	0	3	3	0	1.48
収入源 (kip)					
コーヒー	192,600,000	80,510,000	9,100,000	37,055,000	16,339,114
キャベツ・白菜	0	38,500,000	10,000,000	4,000,000	4,564,000
家畜の売却	0	6,000,000	0	25,000,000	1,070,000
仲買の利益	24,000,000	2,500,000	1,300,000	1,900,000	652,083
合計	216,600,000	127,510,000	20,400,000	67,955,000	22,625,197
支出 (kip)					
米	7,200,000	8,640,000	8,000,000	10,600,000	1,294,605
収穫・除草人件費	60,000,000	25,000,000	800,000	10,750,000	3,012,988
野菜用肥料・種	0	2,945,000	5,875,000	6,670,000	2,972,500
資産保有状況					(所有世帯数)
果肉除去機	2台	1台	1台	1台	18 (37%)
脱穀機	1台	0	0	1台	2 (4%)
耕耘機	1台	1台	1台	1台	30 (62%)
テレビ	1台	1台	1台	1台	41 (85%)
バイク	4台	2台	2台	1台	36 (75%)
トラック	1台	1台	1台	1台	4 (8%)
ワンボックスカー	1台	0	0	0	1 (2%)
レンガ造り家屋	完成	完成	建築中	建築中	-

出所：筆者作成。

世帯は、平均よりもかなり高い。ここから家長の年齢の高さと、世帯の構成員の多さが、比例していることがわかる。しかも、家長の年齢が高い分、世帯内の構成員の年齢も高くなり、学齢期を過ぎ農業に従事できる世帯内労働者の数も多くなる傾向が見て取れる。つまり、ソンと

ブワチャンの世帯では、農民の数が8人と平均の倍程度になっている。ただし、ソンプーンの世帯では、世帯の構成員の数が多いにもかかわらず、農業従事者の数が少ない。これは彼の子どもの多くが公務員や教師といった公的な職に就いており、学校に通っていたりするからである。このことから家庭内労働者だけでは農園の維持管理が難しく、家族外の労働力が必要となる。

牛の頭数は、4世帯とも20頭前後を飼育しており、平均値から見てもかなり多い。また、コーヒーの耕地面積も4世帯とも平均よりかなり多く、ブンラップとブワチャンは5ha弱であり、ソンとソンプーンはそれよりもさらに多い。注意すべきは、耕作しておらず使用権のみ有する空き地の面積が、ソンプーンとブンラップの世帯には3haあり、今後、新たに耕作地を広げることが可能なことである。

収入についてはすべての項目を網羅しているわけではないが、主要なものだけを表に記載している。コーヒーからの収入が最も多いのはソンであり、平均の10倍以上の収入がある。続いて、ソンプーン、ブワチャンの順になるが、ブンラップは平均よりも少ない。一方、ソンだけはキャベツと白菜の栽培をしていないが、彼以外の世帯ではこれらの栽培に従事しており、ソンプーンは、平均の10倍近くの収入を得ている。また、ソンプーンは4頭、ブワチャンは10頭の牛を売却している。興味深いのは、仲買による利益である。ソン、ソンプーン、ブワチャンはコーヒーの仲買、ブンラップのみキャベツの仲買をしているが、そもそもK村で仲買をしている世帯は、この4世帯に加えて、あと数世帯しかない。他の収入源に比べ、仲買による利益は多くはないものの、ソンだけは他の3世帯よりかなり多くの利益を上げていることがわかる。

このように表4から、ブンラップの世帯以外の3つの世帯は、平均よりも圧倒的に多くの収入を得ていることがわかるが、ブンラップへの聞き取りによれば、たまたま筆者が調査をした年は、キャベツの仲買で利益をあげられなかったこと、さらに雨季の大雨で農地が水浸しになりキャベツの収穫量が例年の半分以下だったという理由で、この年の収入は低くなってしまったという。<sup>25)</sup>

続いて支出についてだが、主食である米の購入費と作物の生産に関連する費用について言及する。米は年間で購入した袋数を調査対象者に回答してもらい、1袋あたりの価格をかけた金額を記載している。<sup>26)</sup> 世帯の構成員の数や年齢によって、消費する米の量にばらつきが出ているが、最も多く消費しているのはブワチャンの世帯であり、あとは比較的同じ程度の量を消費

25) 単年の家計調査だけでは、このような天候や市場の変動が収入に与える影響を見過ごしがちになることがわかる。

26) 2007/08年に実施された世帯の支出と消費に関する国勢調査の結果によれば、チャンバサック県の1日の1人あたりの米の消費量は565gとなっている。K村が該当する「道路へのアクセスがある農村部」の場合、598gと記されている [Lao PDR, MPI 2009: 29]。この結果を考慮に入れ、調査対象者の回答の妥当性を検証した。

している。コーヒー栽培をする場合、肥料や農薬代はかからないが、草刈りや収穫で臨時雇用労働者を雇うことがあり、この人件費が必要になる。やはり農園が広ければその分、投入しなくてはならない労働量は多くなり、収穫量の最も多いソンの世帯は、60,000,000 kips もの人件費を支払っており、全体の収入の3分の1弱にも及ぶ。一方、キャベツや白菜を栽培する場合、売却先であるタイ側から指定された種や肥料、農薬を使わねばならない。この購入費は、キャベツ・白菜の栽培規模に比例するが、ブワチャンの世帯がもっとも多く、6,670,000 kips を支払っている。買取価格は日によって変動するため、運が悪いと買取価格が低い日に売却しなくてはならなくなり、赤字になることもある。実際、ブワチャンの世帯は、この年、キャベツや白菜から得た収入が4,000,000 kips しかないので赤字になった。

K村の住民は、獲得した収入のなかから食費、教育費、医療費など、生活に必要な財やサービスを購入しているが、先述したように現金を使いきってもさらに購入する必要なものがある場合、草刈りなどの賃金労働に出たり、親類から借金をしたりする。だが、この4世帯は少なくとも賃金労働に出たり、誰かから借金をしたりしているわけではない。したがって、農業収入より、支出のほうが多くなるという状況には陥っていない。とはいえ、生活必需品を購入した後、余った現金を貯金しておくという習慣がないため、獲得した現金はすべて何らかの財やサービスへの対価として消費される。

なかでも特徴的なのは、すでに記したように彼らにとって必要な物品をすべて購入し、最後に残った分はレンガ式家屋の建築費に回す点である。彼らの場合、結婚後、数年して高床式の家屋を自分たちの手で作り、その後、長い人生をかけて、少しずつ材料を購入し、レンガ式の家屋を建てていく。したがって、レンガ式の家屋を建てられていない世帯は、現金による蓄えがないことを意味し、建築中の場合、生活に必要なものを買い終えて、さらに現金が余っていることを意味する。もしレンガ式の家屋が完成していれば、すでに長年にわたって、支出より収入のほうが多い年が続いてきたことを示唆するのである。

そこで、家屋を含めた資産の保有状況を確認していく。まず、コーヒーチェリーの果肉を除去しパーチメント豆にするために必要な果肉除去機は、調査対象世帯の37%が所有しているが、富裕者4世帯も、1台以上は持っている。脱穀機はパーチメント豆を生豆にする際に必要になるが、これはソンとブワチャンの2世帯のみが持っている。耕耘機は農園から家屋までコーヒーを運ぶために使用されるが、これは62%の世帯がすでに所有しており、富裕者4世帯もすべて持っている。テレビやバイクも、すでにかかなりの世帯が所有しているが、ソンの場合はバイクを4台所有するなど、富裕者の場合、所有台数が比較的多いことが分かる。一方、富裕者世帯とそれ以外の世帯を大きく分けるのが、トラックの所有である。このトラックは韓国のヒュンダイ社製のピックアップトラックを指し、調査対象である48世帯のなかでは、富裕者としてここで挙げている4世帯のみが所有している。さらに、ソンの世帯に限っては、さらに高

価なワンボックスカーを1台所有している。最後に、レンガ造りの家屋は、これら4世帯の中ではソンとソンプーンの世帯のみがすでに完成しており、残りの2世帯は現在建築中である。<sup>27)</sup>

以上の4世帯の家計状況をまとめると、ソンとソンプーンの2世帯の収入は、たとえブンラップが例年ほどの収入が得られていたとしても、他の2世帯に比べて圧倒的に多い。資産についても、ソンがもっとも高価なものを所有しており、家屋はソンとソンプーンの2名のみが完成していることから、やはりこの2名が際立って富裕だと考えられる。では、この2名が、これほどまでに多くの収入を得るようになったのは、なぜなのだろうか。耕作している土地の面積が広いことが直接的な原因にも見えるが、そもそもなぜこれだけの土地を持てるようになったのか。次節では、彼らのライフヒストリーの中からもなぜこの2名が、他の富裕者たちと異なった要因によって多くの収入を得るようになったのかを明らかにする。<sup>28)</sup>

#### IV-3 ソンのライフヒストリー

1938年生まれのソンは、18歳の時にコーヒー栽培を始め、親の紹介により24歳の頃、結婚した。<sup>29)</sup>3年間、妻と同居していたが、彼は軍隊に入り、以後9年間、妻と離れて生活することになった。9年後の1974年、彼は、姉夫婦、弟夫婦と合わせて4世帯でK村に戻ってきた。その後、次々とこの村に他の世帯が戻ってくるが、彼の世帯は、帰還者の最初の集団であった。一方、彼は1986年から1993年まで村長に就任し、1994年以降、第一長老(*neohoom*)を務めている。

2008年現在70歳になったソンの家には、56歳の妻と7人の息子、そして長男の嫁も含む、10人が同居している。彼の出自はラベンであるが、長男の嫁だけがラオである。この家の子どもたちのうち、長男から三男、長女と次女の5名は一切学校教育を受けておらず、10歳の三女と9歳の四男だけが小学校に通っている。この家では家族全員が、収穫、精製作業に従事しているが、収穫期のみ家庭外から労働者を雇っている。上の子どもたちは学校に通ってはいないものの、小さい頃から父親のもとでコーヒー栽培を手伝っており、いまでは一人前の農園管理者として生活している。

ソンは父母から譲り受けた12haのアラビカ種ティピカの農園をK村東側のディンデーン山

27) K村では6軒のレンガ式家屋が完成しており、さらに7軒が建築中だとすでに記したが、ここで挙げた4世帯以外でもレンガ式家屋に住んでいた、あるいは建築中であつたりする世帯がある。だが、この4世帯以外は、調査時の収入は少なかったものの、以前にキャベツ栽培で短期的に儲けた世帯であつたり、親族からの援助があつた世帯であつたりするなど、何らかの手段で現金を獲得している傾向があつた。

28) 他の富裕者たちと異なった要因によって多くの収入を得るようになった理由を明らかにするには、当事者たちのこれまでの生い立ちをもとに、どのように資産を形成してきたのかを跡づける必要がある。このような過程を知るには、当事者自身の語りを集めるという方法がもっとも妥当かつ有効であると判断した。

29) この説明では、結婚時の妻の年齢は10歳前後になってしまうが、ラベンの慣習では決して珍しいわけではない。夫が20歳、妻が12歳の頃に結婚したというラベンの夫婦もいる。

に持っていた。この農地は1950年代中ごろから、徐々にロブスタ種に植え替えられた。ロブスタ種の買取価格は、ティピカと比べるとよくなかったが、ティピカよりも多くの実が付くうえに、木が病気になりにくく、栽培が楽であったためだ。その後、この農地は子どもたちが相続し、今では6haだけが残っている。そのうちの2haは、木が古くなったためか、ほとんど実が付かなくなり、2004年から2005年にかけて、高収量品種のカティモールに植え替えられた。一方、1999年にはドムクワン山の2ha強の農地に、さらに2000年には家屋の裏にある2haの農地にカティモールの、毎年1,000本単位で植えている。

ソンにとって大きな転機となったのは、1994年に設立されたエクスポート社との直接的な取引である。フランスに30年滞在し帰国したシーサヌークが設立した同社は、1994年から97年まで足掛け4年間、K村農民からコーヒーの実を買い取り、約10km離れたM村に設置した加工設備を使用し、水洗式加工を施し脱穀したのち、生豆をフランスへ輸出する事業を行っていた。シーサヌークは、彼の父親から、アラビカ種のよく獲れるディンデーン山に10haの土地を持っている人物がいるので、会いに行ってみるとよいという話を聞き、ソンのもとを訪れた。<sup>30)</sup> それ以来、シーサヌークは多い時で週に2、3回、ソンの家を訪れるようになり、その際、ソンはコーヒー栽培の方法について教わった。K村では40世帯程度が契約していたが、彼はコーヒーの実の品質管理、帳簿付け、村人への報酬の支払い、村人からの情報収集などの仕事をこなし、さらには各村を回りコーヒー栽培を村人たちに促す広報活動まで行い、月に300,000 kipsを同社から受け取っていた。

1999年頃、隣のタテン郡に住む、あるフランス人がアラビカ種のなかの一品種であるカティモール<sup>31)</sup>の苗木を育てており、彼の家に行けば、その種が無料で貰えるという話が周囲の住民に広まった。だが、多くの住民は、積極的にカティモールの導入しようとは考えなかった。その理由は、第一にカティモールは育てるのが簡単で、植樹後3年で多くの実が付くが、8年程度で木が枯れてしまうと言われていたためである。第二に、多くの村人は、既存のアラビカ種がロブスタ種に比べてあまり実が付かず、手入れが大変なのを知っていたが、このフランス人は、自分の植えている種のことをカティモールとはいわずに、住民に評判の悪い「アラビカ(Café noi)」といていたためである。第三に、新しい品種であるためにそれが仲買人に売れるかどうか分らなかったためである。これらの理由から、多くの農民はこのカティモール

30) シーサヌークは、低地の町パークサー出身のラオ人で、フランス統治時代には、コーヒーをはじめとするさまざまな農作物を、タイを経由して国外に輸出する仕事をしていた。彼によれば、ソンに買い付けの仕事を任せしたのは、ソンがこの地域に住む多数派であるラベンの有力者であり、広い人脈をもっていたからだという。さらに彼はラベン語だけでなくラオ語も話せたので、ラオとラベンの仲介役として活動できたからだという。

31) 注8)で触れたとおり、カティモールは本来、アラビカとロブスタの交配種であるが、少なくともラオスでは「アラビカ」として認識されていた。

にまったく興味を示さなかったが、K村ではソンだけが興味を示し、1999年に5kg程度の種を貰い、試しに苗木を作ってみた。その年は600本の苗木を植樹し、その後毎年、1,000本から1,500本程度の本数を植えていった。

植樹後3年して多くの実が付いたので、最初はシーサヌークに頼んで買ってもらった。だが、彼が買い取れる以上に、多くの実が付いてしまったために、彼の友人であるタイのコーヒー輸入業者を紹介してもらい、すべての実を買ってもらう契約をした。現在でもソンの家で取れるコーヒーはすべてこのタイの輸入業者が買い取っている。<sup>32)</sup>

一方、調査当時には、すでに結婚して独立していたソンの子どもたちが、K村やその近隣の村に住むようになり、ソンは彼らからコーヒーの実を買い付けるようになった。買取価格は、相場よりも少し高めに設定しており、買い取ったチェリーは自分の家で生豆にまで加工し、すべてタイの業者に売却している。ここから得る収入が、2008年の場合、24,000,000 kipsであったが、年々、扱う量は増えており、利幅は毎年一定であるため、扱う量が増えれば増えるほど、彼が得る収入は増えていく。タイの業者の側も、買取に制限は設けておらず、すべて購入してくれる。

K村の他の農民とは異なり、彼は独自の販売網を持っていることに加えて、カティモールをこの村では先駆的に導入した点が特徴的である。調査当時には、カティモールはどの農民も植えていたが、多くの保守的な農民と異なり、彼は実験的に少しずつ新たな試みをすることで、高収量のカティモールから多くの収穫を得るようになったといえる。同時に、比較的多くの家族や血縁関係者を持つソンであるからこそ、その関係を通じて、コーヒーの実を買い付けることができる点も他の農民にはない特徴といえる。

#### IV-4 ソンブーンのライフヒストリー

1952年、高原の麓にある町、パークセーで生まれたソンブーンは、中学校を出てから軍隊に入り、車両部隊として軍用車の整備にあたっていたが、1975年12月の社会主義革命のあと、K村から12km北にあった思想矯正施設 (*Samanaa*) に収容された。<sup>33)</sup> この施設は1978年から国営農場 No.23 (*Nikhom No.23*) となり、<sup>34)</sup> 集団化された農場において、コーヒー栽培に従事させられた。当然、この農場を勝手に抜け出すことは許されず、警察や軍に見つかれば捕えら

32) この輸入業者はK村から約15km東にある村で30haの土地を使い、カティモールの栽培もしているが、その土地は、以前、エクスポート社から譲り受けたという。そこでシーサヌークとこのタイの輸入業者のつながりができたようである。

33) この思想矯正施設では、社会主義イデオロギーを植え付ける思想矯正が行われたとされる。

34) この国営農場は、バクソン郡内だけでも数カ所に渡って存在していた。これらの農場は、軍やチャンパサック県によって運営されていた。収穫されたコーヒーは、コーヒー茶公社 (*Bolisat Café Saa*) によって買い取られ、主にソ連や東欧諸国に売られたといわれている。

れ連れ戻されるが、彼は1981年にその危険を冒して農場を脱走した。彼は自動車修理の経験があり、修理のために農場の外に出る許可を得た際に逃走を試みた。そして途中で寄ったK村の当時村長であったソンに、この村の女性と結婚し、自分を匿ってくれるように懇願した。その結果、現在、妻となる女性と結婚し、しばらくK村にとどまるが、その後、数日かけて首都のヴィエンチャンまで向かい、そこで彼は自動車修理工を営んだ。そして市場開放後の1993年、妻の実家であるK村に戻ってきた。

K村移住後、ソンブーンは妻の両親から1haのティピカ農園を譲り受けたものの、他の世帯と比べ非常に貧しかった。というのも、彼は自分が後からこの村にやってきた者であり、空いている土地がすでになく、農地をほとんど広げることができなかったからである。彼は、家屋の裏手の藪を少しずつ切り開き1.5haまで拡張し、キャベツを植え、さらにK村の西側にあまり肥沃でないために使用されていなかった土地を0.5ha切り開き、ロブスタを植えた。その後、2001年に家屋裏の農園は、キャベツからカティモールに変え、1haのティピカ農園に隣接する土地を、さらに0.5ha拡張した。一方、2003年にさらに妻の両親からドムクワン山にある1haの農園を譲り受け、さらに隣接する土地を3ha購入し、全部で4haにして、カティモールを植えた。さらに、2007年には、隣村の農地を1ha購入しており、今後、この農地に苗木を植えていき、コーヒー農園をさらに拡張していくという。

このように農地を拡張する一方で、ソンブーンは1997年にK村にやってきたスイスのNGOから有機肥料の作り方を学んだ。<sup>35)</sup> このNGOは、野生動物の狩猟禁止と自然環境の保全を住民に訴える活動をしており、その一環として有機肥料の作り方をK村の住民に指導した。当初は、K村の数世帯が実施していたものの、しばらくしてソンブーン以外の住民は作製を止めてしまった。<sup>36)</sup>

このソンブーンに転機が訪れたのは、2001年であった。同年、フランス開発庁による援助プロジェクト<sup>37)</sup>の一環として、K村に生産組合を作ることになり、その際、集まった8世帯のなかで、組合長を選ぶことになった。ソンブーンは軍隊にいた当時、パークセーで英語学校に通っていたため、少しだけ英語を話すことができた。周囲の組合員は外国とのやりとりには英語ができなくてはならないと考え、彼を組合長に推薦した。この際、フランスの援助機関はカティモールの苗木を植えるように薦めてきたというが、組合加盟世帯のなかで、もっとも積極

35) ソンブーンの作製する有機肥料は、パナナの皮などの生活ごみを砂糖、水の入ったポリバケツに入れ、生物活性水を混ぜて作ったコンポストを、牛糞とコーヒーの果肉の滓に混ぜることによって作られる。

36) K村をはじめこの地域一帯では、コーヒーに化学肥料を播くことはなく、何の肥料も播いていない世帯が多い。もっとも近年になってコーヒーの果肉や牛糞を肥料にする世帯が徐々に増えてきたが、それもごく一部に限られている。

37) この援助プロジェクトは、ボラベン高原農業開発計画 (Project de Développement Rural du Plateau des Bolovens: PDRPB) と呼ばれ、1997年から2002年まで続いた。

的にカティモールを植えたのは、ソンプーンだけだった。その後、フランスからの援助は途切れたものの、2003年に国際NGOのオックスファムが、K村で貧困削減プロジェクトを実施することになり、新たな組合を作ることになったが、その時も、彼は同じ理由で組合長に就任した。

組合長就任後は、オックスファムの資金により、さまざまな研修を積極的に受けていく。例えば、ベトナムにテイスティングの勉強に行き、パクソン郡内にあるコーヒー調査実験センターにおいて、コーヒーの水洗式の加工技術を学んだ。この結果、彼は政府主催のフェアトレードに関する国際会議に、農民の代表として招かれたり、コーヒー実験場のスタッフに紹介を受けたタイの輸入業者と取引するようになったりと、村落外部の要人との接点を増やしていく。

そして特筆すべきは、生産組合の活動を経験することで得た新たな知識が、新たな収入を生み出す資源となったことである。組合の誕生直後の時期、多くの仲買人は良質の豆がどのようなものなのかが見分けられず、ソンプーンのような知識のある人に良質な豆を選んでもらう必要があった。したがって、ある国外の輸入業者が収穫直前に彼に現金を渡し、農民から良質な豆のみを買い付けるように求めた。その結果、彼はその元手の資金を使って、農民から豆を買い付け、いくらかの手数料を得るようになった。つまり、彼自身も仲買人を始めるようになったのである。とはいえ、仲買による利益は、自分の農園のコーヒーから得る収入よりもずっと少ない。

以上のように、ソンプーンはK村にやってきた後発組であり、そのため利用可能な土地へのアクセスが困難であった。加えて、妻の親族は別として、彼自身の血縁関係者は一人もおらず、親族による相互扶助を受けることもままならないことから、彼は安定した生活を送る上で、決して恵まれた環境にはなかった。だが、英語が少し話せるという、他のK村住民にはない優位性があったために、援助機関などの村落外部とのつながりを切り開くことができるようになり、さまざまな収入上昇のチャンスを得ることになったのである。次章では、このソンとソンプーンの2名が富裕者になりえた理由について、さらに詳しく検討していきたい。

## V 農民富裕者誕生の要因

### V-1 土地の広さと土地利用の仕方

本章では、ソンとソンプーンの経歴から、彼らが多くの収入を得るようになった要因を分析する。まず確認しておきたいのが、この2人は、ともに銀行からの融資を一切受けていないという点である。パクソン市街に近い村々では、銀行から融資を受けて農園を拡張している者が頻繁に見られるが、K村の農民は融資を受けるには手続きが煩雑なことくらいは知っているも

の、融資を受ける具体的な方法を知らず、あえて自ら銀行に赴いて融資を受けるような者はいない。それはソンやソンプーンも同じである。ソンは、そもそも文字が書けないということもあり、銀行からの融資を望んではいない。ソンプーンは、オックスファムとの関係のなかで、生産組合としてパークセーの銀行に口座を持つことになったが、彼もまた融資を受けるつもりはないという。

もっとも、2人はまったく借金をしたことがないというわけではない。ソンの場合、コーヒーの水洗加工の際に必要なコンクリート製の豆の水洗場を設置するのに、タイの輸入業者から数百万 kips を借りたことがある。<sup>38)</sup> 一方、ソンプーンも仲買をする際の買付資金として、輸入業者から数百万 kips を借りている。だが、彼らの収入からすれば、大きな規模ではなく、この融資が理由で富裕になったとは考えにくい。

同様に家族や親族からの送金という要因も、やはり、この2人には当てはまらない。現金収入源が比較的少なく、なおかつ利用可能な土地が少ない場合、住民はラオスの都市部や隣国のタイに出稼ぎに行く傾向があるものの、すでに述べたように、K村ではまだそのような傾向がなく、出稼ぎにしている家族からまとまった額の送金を受けているという世帯はとても少ない。ソンの場合、子どもたちはみな近隣で農民となり、ソンの兄弟もまた、みなK村に住み、コーヒー栽培に従事している。一方、ソンプーンの場合、そもそも彼自身に兄弟がいなければならず、彼の子どもたちは公務員になるなど、まとまった金額を送金できるほどの収入を得られる仕事には就いていないため、やはり血縁関係者からの送金を期待できない。<sup>39)</sup>

むしろ、両者に共通するのは、K村の平均的な住民がもつ農地よりも、ずっと多くの農地をもっている点である。ソンはK村平均値の約5倍にあたる10ha、ソンプーンは約4倍にあたる8haである。確かに、ソンプーンはもともとそれほど多くの土地を持っていなかったものの、土地を購入することで、8haにまで広げてきた。その購入の際の資金となったのは、牛の売却益である。したがって、牛や土地という従来からある資産こそが、富の源泉といえなくはない。

しかし、多くの土地を持っているということが、直接、多くの現金収入の獲得につながるわけではない。例えば、ソンプーンと同じかそれ以上の土地を所有している者は、K村の中で、ソンの他に2名いるが、どちらも収入面では、ソンプーンの3分の1程度である。したがって、土地の広さ以外の要因にも目を向けなくてはならない。そこで、注目すべきは土地利用の仕方である。ソンのライフヒストリーから見いだせる重要な点は、彼が、村で先駆的にカティモー

38) これを設置するには、一般の農民にとっては大きな出費となるため、ほとんど導入されておらず、バケツを使って手作業で豆の滑りを取る。だが、これでは作業に時間がかかるので大量の豆を処理する場合には水槽があった方がよい。

39) ラオスの公務員は俸給表によれば、高等教育機関レベルの学歴の場合、月394,200～599,400 kipsとなっている [総務省大臣官房企画課 2006: 46]。

ルを植えた人物であるということだ。調査当時、K村の多くの農園で、従来からのティピカやロブスタの木が古くなり、実が付かなくなってきた。そこで次第にカティモールに切り替える農家が増えてきたが、ソンだけは、これに先立つ1999年ころからすでにカティモールを導入していたのである。<sup>40)</sup>もしこの時にカティモールに切り替えていなければ、彼もまた、他のK村住民と同じように、収穫量の減少に頭を悩ませていただろう。現にソンによれば、2008年には、従来からある4haのロブスタ農地から、たった50kgしか収穫ができなかったという。このような新たな試みによって、彼は今日ほどの収入を得るようになったといえる。

ソンと同様、ソンプーンも他の農民が見向きもしないことを実験的に導入してきた。それは有機肥料の作製と散布である。先述のように1997年にスイスのNGOが有機肥料の作製方法を伝授するプログラムをK村で実施した際、K村の人々は有機肥料の作製の仕方を専門家から学んだものの、彼以外のすべての住民は、調査時点では完全に止めてしまった。だが、彼だけは、この時に学んだ方法を長年実施している。このようにソンがカティモールを先駆的に導入したのに対し、ソンプーンは有機肥料を実験的に導入し、単位面積当たりの収穫量を増やしてきたといえる。<sup>41)</sup>

## V-2 輸入業者との直接取引

彼らに共通するのはこの実験精神だけではない。村落外部の人々との関係を積極的に利用して、新たな情報を得たり、あるいは豆の買い手と「直接」結びついたりしている点にも注目すべきである。とくにこの直接取引が有利なのは、買取価格を自分たち自身で交渉したり、業者から何らかの援助や融資が受けられたりする点である。一般的に農民は、仲買人を通して豆を売却し、さらに、その仲買人が国内の輸出業者や国外の輸入業者に売却するのだが、ソンは豆の輸入業者と直接、売買することで、彼自身が業者と取引の交渉をしている。そもそもカティモールの買い手を積極的に探すためには、村落外部の人脈を駆使しなければならないため、一般の農民には難しい。だが、ソンは、シーサヌークからタイの輸入業者を紹介してもらい、その業者が生産しただけ豆を買い取るという好条件を提示しているため、市場取引に付随する買

40) K村において1999年にカティモールを導入した世帯は、全部で4世帯であった。これらの世帯は、すべてソンの兄弟、あるいは近い親類であった。

41) 富裕者として挙げた4名は、みな牛糞とコーヒーの実の滓から作った堆肥を播いている。ただし、播いているのはカティモールの農園のみであり、ティピカとロブスタの農園は、居住地から遠いこともあり、堆肥の運搬は困難で放置されたままとなっている。堆肥は、飼っている牛の頭数が多ければ、その分、多く生産できることから、この4名が、他の農民よりも比較的多くの堆肥を播いているといえる。だが、堆肥の量と収穫量とのあいだに有意な相関関係を見出すことはできなかった。ここで言及したソンプーンの有機肥料とは、牛糞やコーヒーの実の滓以外に、コウモリの糞や鶏糞を混ぜ、果実の皮や砂糖を混ぜて作った発酵液を散布して作製したものであり、他の3名の堆肥とは中身が異なる。

取量や価格に関する不安定な要素にさらされることなく、豆を売却している。もし、このタイの輸入業者が、価格や買取量を、毎年、急激に変動させたり、買い取りを止めたりする事態になれば、ソンが積極的に拡大してきたカティモールの生産も無駄になる。逆にいえば、ソンは、タイの業者が安定して買い取ってくれている経験があるからこそ、カティモールの拡大を積極的に図ってきたといえる。

ソンプーンにも、同じことがいえる。ソンが豆の輸入業者と直接売買したのに対し、ソンプーンは、オックスファムという国際NGOとの関係を築いてきた。このオックスファムが買取を依頼した日本の輸入業者も、直接、K村を訪問し、毎年、生産組合の組合員と顔を合わせて売買交渉を行い、関係を築いている。2004年当時、コーヒーを日本に輸出している農民はどこにもいなかったが、「品質にうるさい日本が買い取っている」ということが次第に評判になり、この評判のおかげで国内の新聞などで話題となり、組合長であるソンプーンの家には訪問客が増えた。この結果、彼は海外の輸入業者に直接、豆を売るようになったのである。ソンだけでなく、ソンプーンもまた、村落外部のコネクションを活かして、富裕者になっていったのである。

## VI 結 論

本稿では、自給作物から換金作物へ移行しつつある「換金作物移行期」の農村とは異なり、すでに換金作物の栽培を生業の中心としている「換金作物移行後」となる、ラオス南部のコーヒー栽培地域において、村人が考える「富裕者」とはどのような人びとかを特定し、そのような富裕者のライフヒストリーを辿りながら、彼らがいかにして富裕者となったのかを明らかにしてきた。

これまでも換金作物の導入が、現金収入源となり農村社会に富裕層が生まれてきたことは指摘されてきたが、K村のようにすでにすべての世帯の主な生業がコーヒー栽培となっている状況では、単に換金作物を導入するというだけでは富裕者にはなりえない。一方、銀行からの融資や海外からの送金など村落外部の人間関係を駆使して現金を手に入れることで、収入上昇を図る富裕者の存在が、これまでに指摘されてきたものの、これらの要因は、K村では見いだせなかった。

また、これまで村落内で多くの所得を得るようになるには、住民の認識では、多くの農地を所有したり、多くの家畜を飼育したりしている必要があった。つまり、物的な資産の保有とその土地から得る収穫物や家畜の売却による所得の向上という要因が鍵となっていた。実際、今でもほとんどの農民が、コーヒーの収穫量を上げるには「多くの土地が必要だ」と考えている。K村の農民は、「私は土地を多く持っていないから貧しい」とか「これ以上広げられる土地が

ないから、貧しいままだ」と嘆いたりする。また、筆者が金持ちになる条件を副村長に訪ねた時、「多くの家畜を飼っていること」だと答えた。彼は村の中の金持ちを数人挙げたあと、「奴らは多くの牛を飼っていて、それを売って土地を広げたから金持ちになったんだ」と述べた。このような語りからわかるように、K村のなかでは、土地と家畜が、富裕者になるための必要条件だと考えられている。

だが、富裕者誕生の要因を単一の要因に還元せず、富裕になった過程に注目した本稿から明らかになったのは、必ずしも土地や家畜を持っていることが、直接、現金収入の増加を招くわけではないということである。むしろ、農村富裕者が誕生した要因として重要なのは、他の住民より早く新しい品種を導入したり、新しい農法を実践したりする実験的な精神を持ち合わせ、輸入業者と直接取引することで、安定的に売却先を確保しているという点であった。ソンの場合、まず比較的広い農地が利用可能であったという要因に加えて、カティモールという高収量品種を他の農家に先駆けて導入したという点、さらにはその新しい品種を安定的に買い取る業者と直接売買しているという点が特徴的であった。一方、ソンプーンの場合、牛の売却により土地を購入し、農地を広げたくて、有機肥料を実験的に導入し、さらに日本へのコーヒーの売却に成功することで評判を得て、さまざまな買い手と直接、売買するようになったという点が特徴的であった。彼ら2名とも、実験的な取り組みと輸入業者と直接取引という点が共通していたのである。

もちろん、ラオス農村部において村外のコネクションが所得向上に貢献してきたことは、これまでも指摘されてきた〔横山 2001〕。だが、重要なのは、生業構造が変容することに伴って、所得向上に寄与するコネクションの性質も変化してくるという点である。換金作物栽培地域では、農民は主食である米を自給していないため、米が購入できなくなるというリスクは極力避けるよう行動することになる。そのため、干ばつなどの気象条件による収量変化というリスクに加えて、市場価格の変動が農民にとって、多大なリスクとなる。そこで、作物の売却先と直接交渉し、取引することができれば、価格変動によるリスクは多少なりとも緩和される。実際、ソンもソンプーンも、どちらも自身が輸入業者と買取価格について交渉し、一般の仲買人よりは高い価格でコーヒーを売却している。<sup>42)</sup>つまり、村外とのコネクションといえども、換金作物栽培地域では、出稼ぎ労働者や海外移住者、あるいは政府で働く公務員といった人々との関係よりも、国外の輸入業者と継続して直接取引するという関係がより重要になってくるのである。ラオスの農村部において、米を自給していない地域はとて珍しく、このような地域において重要となる村外とのコネクションは、やはりいまだ米の自給に頼ることのできる農

42) 2007/08年の買取では、一般の仲買によるアラビカ種のパーチメント豆の買値が17,000 kips/kg 前後であったのに対し、ソンは18,000 kips/kg、ソンプーンの生産組合も18,000 kips/kg 程度（生豆24,000 kips/kg をパーチメントの買値に変換した数値）であった。

村とは異なる性質のものになるといえるだろう。<sup>43)</sup>

もっとも、この「移行期」やそれ以前においても、中国系の仲買人とカルダモンなどの林産物を売買することはあったため農民と海外とのコネクションがあったことは否めない。だが、そこで取引される産物は、主な生業とは直接結びついておらず、売買の規模は比較的小さかった。だが、「移行後」の海外とのコネクションは、主な生業であるコーヒーの取引を行うために作られたものであり、農民にとって家計の維持に密接に結びつく、比較的規模の大きいものとなっている点で質的な違いがある。

この国外の輸入業者との直接取引は、交通網の整備によって買い手が自由に村落内に入り込めるようになったという条件が整う必要があるだけでなく、国外の買い手による近年のコーヒーへの注目によって、小規模の買取とはなるが、より品質のよいコーヒーを農家から直接購入しようとする市場の動向によって成立しているともいえる。このような新たな市場の動向が、「村落全体の」農民に対してではなく、「特定の」農民に対して現金をもたらし、富裕にさせる契機となっている。

ラオスの高原や山地部において換金作物の導入に伴い、急速に大きな資本が投下され、農村を取り巻く人間関係や生業形態が大きく変容していくなかで、本稿で得られた知見は、他の農村地域の富裕者の誕生要因を理解するうえでも寄与するところが大きいと考える。

## 謝 辞

本稿で使用した資料は、2008年度笹川科学研究助成、2008年度松下国際財団研究助成による援助を受けて実施した調査によって得られた。各財団に感謝の意を示したい。

## 参 考 文 献

- 百村帝彦. 2008. 「植林事業による森の変容」『ラオス農山村地域研究』横山 智；落合雪野（編），233-266ページ所収. 東京：めこん.
- 岩田慶治. 1960. 「ボロヴェン高原の人文地理——開拓と民族」『人文研究』11(2): 46-70.
- 国際協力事業団. 1996. 『ラオス人民民主共和国 ボロベン高原農業・農村総合開発計画調査 主報告書』東京：国際協力事業団.
- 河野泰之；藤田幸一. 2008. 「商品作物の導入と農山村の変容」『ラオス農山村地域研究』横山 智；落合雪野（編），395-430ページ所収. 東京：めこん.
- 中辻 亨. 2004. 「ラオス焼畑山村における換金作物栽培受容後の土地利用——ルアンパバーン県シェンヌン郡10番村を事例として」『人文地理』56(5): 1-19.

43) たしかに稲作地域においても、国外の輸入業者と継続して直接取引している者がいる可能性はある。だが、それは換金作物栽培地域とは異なり、その取引なしでは家計を維持できないという類いのものではないだろう。とはいえ、本稿は稲作地域との比較研究が主眼にあるのではないため、詳細な検討は別稿に譲りたい。

- . 2005. 「ラオス北部焼畑山村にみられる生計活動の世帯差——幹線道路沿いの一行政村を事例として」『地理学評論』78(11): 688–709.
- 佐藤 仁. 2002. 『希少資源のポリティクス』東京：東京大学出版会.
- 総務省大臣官房企画課. 2006. 『諸外国の行政制度等に関する調査研究 No.14 ラオスの行政』.
- 横山 智. 2001. 「農外活動導入に伴うラオス山村の生業変化」『人文地理』53(4): 1–20.
- . 2007. 平成16～18年度科学研究費補助金成果報告書『東南アジア大陸山地部におけるヒト・モノ・情報の流動と生業構造変化に関する空間分析』.
- 横山 智；富田晋介. 2008. 「ラオス北部の農林産物の交易」『モンスーンアジアの生態史 第2巻』クリスチャン・ダニエルズ（編），101–120ページ所収. 東京：弘文堂.
- Baird, Ian; and Shoemaker, Bruce. 2008. *People, Livelihoods, and Development in the Xekong River Basin, Laos*. Bangkok: White Lotus Press.
- Castro, Alfonso Peter; Hakansson, N. Thomas; and Brokensha, David. 1988. Indicators of Rural Inequality. *World Development* 9(5): 401–427.
- Chazee, Laurent. 1999. *The People of Laos: Rural and Ethnic Diversities*. Bangkok: White Lotus Press.
- Ducourtieux, Olivier. 1994. *L'Agriculture du Plateau des Bolovens (Evolution du systeme agraire de la region de Paksong-Sud-Laos)*. Paris: Institut National Agronomique Paris-Grignon.
- Grandin, Barbara E. 1988. *Wealth Ranking in Small Holder Communities: A Field Manual*. Intermediate Technology Publication.
- Lao PDR, CPC (Comite pour le plan et la cooperation). 1995. *Project de Development Plateau des Bolovens*. Vientiane: National Statistical Center.
- Lao PDR, CPI (Committee for Planning and Investment). 2005. *Statistics 1975–2005*. Vientiane: National Statistical Center.
- . 2007. *Statistics 2006*. Vientiane: National Statistical Center.
- Lao PDR, MPI (Ministry of Planning and Investment). 2009. *The Household of Lao PDR: Social and Economic Indicators: Survey Results on Expenditure and Consumption of Household 2007/2008 (LECS4)*. Vientiane: National Statistical Center.
- Lao PDR, SCCPH (Steering Committee for Census of Population and Housing). 2006. *Results from the Population and Housing Census 2005*. Vientiane: National Statistical Center.
- Matsushima, Yoko; and Vilaylack, Chongpraseuth. 2005. Coffee Economy in Lao PDR: A Review of Development under the Changing Trade Environment and Export Potentials. In *Macroeconomic Policy Support for Socio-economic Development in the Lao PDR Phase 2 Main Report*, Vol. 1, pp. 70–198. Tokyo: JICA.
- Rigg, Jonathan. 2005. *Living with Transition in Laos*. New York: Routledge.
- Schliesinger, Joachim. 2003. *Ethnic Groups of Laos, Vol. 2: Profile of Austro-Asiatic-Speaking People*. Bangkok: White Lotus Press.
- Silverman, Sydel F. 1966. An Ethnographic Approach to Social Stratification. *American Anthropologist* 68(4): 899–921.

(2013年7月12日 掲載決定)